

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幢ヶ谷九〇四 電話(03)3337714649

FAX(03)3229915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額700円 6カ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言

脱原発闘争 労組の闘いが始まった

..... 2

「脱原発社会をめざす労働者実行委員会結成へ」

..... 2

米国の「分裂」

..... 3

―大統領選が示したもの―

原発事故被災者 相双の会

..... 5

―まちこの被災地訪問 福島県小高地区―

私の再出発

板倉 好幸..... 6

階級闘争の「知の眼差し」で

花井 吉宅..... 7

―起死回生の手を提示すべき―

オスプレイ配備阻止

スクラムユニオン広島..... 8

―普天間現地行動報告―

話し合い求め市長室前座り込み

..... 9

―尼崎市 労働福祉会館廃止に抗して―

東京「原発いらぬ」八〇%

..... 10

―東京新聞世論調査 宇都宮さん勝利へ―

#### 資料と解説

人権派弁護士・宇都宮健児氏立候補

..... 11

―東京都知事選挙について

読者からのおたより

..... 14

# 旬刊 社会通信

NO. 1133

二〇二二年二月一日号

二〇二二年二月一日発行  
(毎月一日・二五日二回発行)

## 脱原発闘争 労組の闘いが始まった

「脱原発社会をめざす労働者実行委員会」結成へ

全労協傘下の六つの労働組合（全日本港湾労働組合、国鉄労働組合、全日本建設運輸帯労働組合、全国一般労働組合全国協議会、東京清掃労働組合、全水道東京水道労働組合、東京都労働組合連合会）が八月十二日、小出裕章さんを講師に招きおこなった「脱原発社会をめざす労働者集会」は、東京では労働組合が主催したはじめての大きな集会となった。会場は定員一二〇〇人、主催者発表では一二六〇人とあった。

反・脱原発の集会・学習会は「さよなら原発アクション」「金曜官邸前デモ」「産経省前座り込み」等、拠点を設け全国で連日連夜行われ続けている。原発爆発から一年半を経た今も、反・脱原発のウネリは拡大しつづける。問われたのは労働組合の反応の鈍さだった。集会に労働組合の姿が見えない。参加者には子や孫を心配するおかあさん、おばあちゃんの姿が目立つ。「労働組合はなにをしているの」と労働組合と「市民」の対立は深まる一方であるかに見えた。こんなときの「八・一二労働者集会」である。

一〇月三日、六つの労働組合は「八・一二」の成功を受け、労働者・労働組合の運動を積みあげ、「持続的な反原発運動のさらなる強化」「さよなら原発一〇〇〇万人アクション」への運動」を目的に、「脱原発社会をめざす労働者実行委員会」結成を呼びかけた。

その内容は二〇一三年二月一五日、「脱原発をめざす労働者集会」（場所・日教組会館大ホール）を開く。前段のとり組みとして二〇一二年十一月二〇日、「実行委員会結成と、「脱原発基本法学習会」（全水道会館 海渡雄一弁護士）。二〇一二年十二月十四日、上映会「原発の町を追われて」と制作者・堀切さとみさんの話を聞く会（田町・交通会館六階）が予定されている。

こんな時、原発を社会・経済・政治・文化の全領域から勉強できるすばらしい著作が刊行された。原野人さんの『確かな脱原発への道 原子力マフィアに勝つために』。原さんはメディア流の「原子カムラ」に「原子力マフィア」を対置する。そのわけはなにか。本著第一章原子力マフィアの実像、第四節原発になぜこだわるのか（一八頁）、でこう述べる。

「マフィアの親分たちはなぜこれほどまでに原発にこだわるのだろうか。  
三菱などのメーカーにとっては、独占利潤を含む巨額な商売ができる。

電力会社にとっては、「総括原価方式」が原発に極めて都合である。投下した資本に比例して、法的に「事業報酬」として独占利潤を確実に上乘せして電力価格を決めることができる。投下した資本には「人件費」（可変資本）も含まれるが、設備費、核燃料費などの不変資本に比べれば、大事故がない限り相対的にも絶対的にも小さくなり、資本の有機的組成がきわめて高度化している。この不変資本は巨大なだけに、献金や寄付なども「原価」の中に容易に忍び込ませることもできる。原発

は一基（数機）で何兆円と、不変資本を巨額にすることによって、メーカーとともに、電力資本の利潤を大きくすることができる。こうしてマフィアにとつては、原発がやめられない特別な麻薬となる。

中曽根康弘氏をはじめ、若きは松下政経塾を卒業した面々の多くなど、原発をもつことを、いつでも自前の核武装ができる技術的・産業的能力を保持しておくために必要だと考えるマフィアも少なくない。これも脱原発を困難にしている原因の一つである。特に安全性も経済性も成り立ちえないことがとうに実証されている核燃料サイクルを、廃止したがない大きな要因となっている。」

## 米 国 の 「 分 裂 」

### ― 大統領選が示したもの ―

**米国という国** 米国大統領選は一年におよぶ。上院（任期六年）・下院（任期二年）ともに解散はなく、大統領選と同時に議会選挙が行われ、州知事選挙もこの日に集中する。統領の資質は長丁場のこの選挙戦でためされる。資金力と体力で他を圧倒した者が大統領選に臨む。戦は民主オバマ（現職）と共和ロムニーの対決となった。

米国はブルジョア二大政党制の典型だ。民主と共和両党に外交・安保・通商・産業といった国の存在に大きくかわる基本政策にはほとんど違いはない。米国は移民国家であり、ヨーロッパやアジア諸国のような身分制封建体制を知らない。「純粹」の資本主義として生まれ、こんにちもあるからだ。ここに自由主義、自由競争・自助努力の根拠がある。全米の国民投票が大統領の権威をつくる。

**オバマとロムニ** オバマが勝った。オバマは勝利宣言で①我々の団結を完全なものにする仕事が前へ進んだ、②我々はそれぞれ独自の夢の実現をめざしていても、米国という一つの家族であるという信念を再確認できた、と米国社会の団結と協調・融和を強調してみた。選挙戦の特徴は、資本主義社会では当然の階級対立と階級闘争の芽が吹き育ち始めたことを知らしめたことではなかったか。

民主、共和は同じ保守だが支持基盤は多少ことなる。民主は最大の支持基盤である労働組合のAFL・CIOに貧しい白人、女性、黒人や毎年二〇〇万をくだらない中南米諸国等からの移民、それに東部のインテリや西部の新興産業情報技術の経営者層などである。オバマは弁護士そして黒人だ。共和最大の支持基盤は財界、ふるくからの独占資本とその団体全米製造業者協会、銀行・石油協会、農家、地方の小商工業主である。ロムニーは金融業で一儲けした人物、しかも投機屋だ。

**独占資本と労働組合** 大統領の行方を占う指標とされたのが失業率とGDPのゆくえ。大統領選後半、両党の主要支持団体間でもしろうい論戦があった。発端は米政府が九月失業率がマイナス〇・一％の七・八％と報じたこと。独占資本の団体全米製造業者協会は「統計操作」と批判し、こうオバマを批判した。

「失業率の低下にもかかわらず、いぜんとして精彩を欠く内容。米国民はなお仕事を必要としている。こうした状況は受け入れられない。」

経済がわれわれの必要とするようになかたちで成長するには、ワシントンの指導者は大胆な政策を立法化し、確実性を生み出す必要がある。」

全米製造業者協会はあとにふれるロムニーの政策―大企業と富裕者への減税、起業家への支援―が必要、そうして投資拡大↓企業成長↓雇用拡大が可能という。

米財界に「対立」するAFL・CIOの主張はこうである。

「ブッシュから引き継いだ深い穴から抜け出そうと、われわれが努力するなかで、失業率が減ったことは、米経済に若干勢いが付き始めていることを裏づける。

オバマの政策によって、米国は第二の大恐慌となる事態を回避した。大幅な削削減が不可欠な行政サービスを奪い、もっとも影響を受けやすい国民のくらしをさらに悪化させる。」

米国の階級構成は人口三・一億中、労働力人口二・三五億人。労働者は一・五五億人、失業者一千八百万人、学生層一千四百万、農民・小商工業主他の中間階級は三千万人超。彼らが民主、共和のどの党を支持するかといえればおおよそ三対三対三。最後の三は支持なし層である。これを基本に大統領選の票獲得運動が展開される。

庶民は一ケタから二ケタのネット献金で己が支持する候補当選を応援する。金持ちたちは買官―米国の伝統として勝利に貢献した人物に高い地位を与える―を目的に献金する。資金力が最後にモノを云うのが米国大統領選の昔も今も変わらぬ傾向だ。

**資本と賃労働の対立** 米国大統領選最大の特徴は国民生活、貧困と格差、富める者と貧しき者の対立とをめぐる経済政策が焦点となったことだ。米国建設以来の自由競争、自己責任論で「アメリカン・ドリーム」、万民の公正・平等・公平の実現が夢物語となったことである。よくいわれるのが「一%が九九%を支配する、こんな社会はおかしい」と、米国資本主義、いや世界資本主義の象徴であるウォール・ストリートに激しいデモが展開された。

格差、富の集中をなくすためどうするか。オバマは「中間所得層を主体とした経済政策で国を前進させる」と①「中間層」への減税継続、高所得者への負担増、②無保険者をなくすための医療保険制度改革、③優遇税制度などで製造業で百万人の雇用創出をめざすことを主張した。ロムニーは「最善の雇用創出策は経済成長」と①法人税引き下げ、②あらゆる階層での所得税率引き下げ、③医療保険制度改革は企業の負担ふやすから撤廃を主張した。

オバマは富裕者から多くとり貧しい者へ配分するといひ、ロムニーは富裕者がより豊かになることで、国の成長はうながされるといふ。これは「上位一%が二〇%の所得を支配する国か」と「貧しき庶民の国か」、よくいわれる「大きな政府（国家）」か「小さな政府（国家）」かの対立である。こんどの大統領選でみられた最大の特徴がこれである。この本質はなにか。

これまで階級対立、階級闘争は無縁といわれ、社会主義思想が根付くことがなかった米国においても資本主義の根本的矛盾が顕在化し、社会・政治のあり方が、全国的に問われてきたことである。このように所得格差がさらに拡大していけば、単なる経済問題にとどまらず、政治的な問題にまで発展していく、その可能性がある。

## 原発事故被災者 相双の会

―まちこの被災地訪問 福島県小高地区―

地震・大津波・放射能の被害地域、東北の三陸沿岸の復旧・復興の動きは鈍い、進んでいない。当該地域、それら地域を訪ねた仲間、現地を訪ねての編集子の想いもそうだ。現地の不安は高まるばかり、政治批判が高まる。

編集部にさまざまなニュースが寄せられる。それらニュースのなかから福島の南相馬市小高地区のみなさんが組織する「原発事故被災者相双の会」(十月三〇日号)、この地区を訪ねたまちさんの訪問記(神戸ワーカーズユニオンニュース、二八三号)から紹介する。(編集部)

**遠くへ** 福島原発二〇km圏内小高地区からの避難者二人の話を総合すると、地震直後はまず津波が来るかもしれないと高台に避難したが、その時、以前から原発の運動をしていたので「原発は大丈夫なのか」とすぐ考えたそう。それから、ほとんど情報がない中、学校体育館に何百人もの人が避難している所へ校長が蒼い顔で「行政から何の指示もないが原発が爆発したらしいので、とにかく遠くへ逃げて下さい」と言い、七〇八割の人が車でバラバラに散って行った。「遠くへ」と言われても情報がないので、逆に放射線量の多い方へ避難した人も多かったようだ。菅野さんはガソリン切れで、親戚に迎えに来てもらったそう。

今までつながりのあった地域の人たちの避難先もバラバラ、家族さえバラバラになり、これではいけないと国分さんたちは避難先の小高地区被災者を探し回り、集まってもらって「おだかの会」を結成された。民宿などを回っている時、ネックになったのは「個人情報保護法」だと言う。阪神淡路大震災の時にはなかったことだ。

「忘れもしない」と、最初の集まりの時の事を国分さんはこう話した。「これからどうなるのか? という話で原発の危険性を知っている私は『もう帰れないべ』と言ってしまい、みんなから『そんな希望のないことを言うな!』と猛反発を喰った。それから生活再建のため被災者の要望に添って活動している」とのこと。

**分断** 地区は一家に一人は東電関係者がいるが、その人たちにも「原発で働きたくて働いてきたわけではないだろう。生活のためにやむを得ず働いてきた。同じ被害者として一緒にやっ行ってこう」という話をしている、と言われていた。

また悲しいのは東電からの補償の額が、被災者の中でも地域によって三段階に線引きされて差をつけられ、「あそこはたくさんもらった」など心情的な分断がなされている、ということだ。福島差別もあり、避難先の学校で子どもがイジメにあったり、「原発マダム」という言葉ができたりしている。

**設立宣言** 国分さんたちは双葉地方や相馬地方の人たちとも力を合わせるため、「原発事故被災者相双の会」を立ち上げ、マスコミに取り上げられたので、今、毎日各地の小さな会の人から電話がかかってきているそうだ。設立の「人間らしい生活再建の宣言」にはこう書かれている。

「原発を『安全』と言い張り、事故後も情報を隠し、甚大な被害をもたらした全責任は国と東京電力にあります。私たちは彼らに対し命を返せ、家族を返せ、故郷を返

せ、健康を返せ、仕事を返せと言いたい！」と。

後で連れ合いと女同士の話をさせて頂いたが、娘さんが南相馬の役場に勤めているので週末しか帰って来れず、慣れない土地でお孫さんの面倒を見ておられるそう。太平洋側の小高は暖かく、雪かきをしたこともなかった。この冬は大変だったという。お母様は老人ホームに入っておられたが、国分さんたちが逃げ惑っている間にやはり横浜など三ヶ所を転々と移され、環境の変化が堪（こた）えたのか山形の特養で亡くなられたそう。遠くへ死に目にも会えず、葬式も出してやれず、小高に帰れないので納骨もできない。あの事故で家族がバラバラにさせられてしまった……！」と目を真っ赤にして涙を流された。

私たちはその辛さと悔しさを思い、もらい泣きをしてお別れをした。それでも彼女は「私たちはまだ良いほう。もっと大変な人がいっぱい居られる。おだかの会ができて本当に良かった」とおっしゃっていたのが救いだ。

この旅では私たちは直接的には何も支援ができなかったけれど、被災者の方々の思いを神戸でも広め、ともに原発をなくし、大飯原発再稼働反対の運動を少しずつ地道にしていくことの使命を感じた旅だった。（神戸ワーカーズユニオン、十一月九日号）

## 私の再出発

**父の消息、出産** 原発事故からあつという間に一年半が過ぎてしまった。いまだに整理がつかないでいます。我が一族は二〇一一年三月一二日大地震の翌日、小高工業高校体育館に避難していた。原発が爆発したテレビを見ていたら直ちに避難指示がでた。

迷うことなく原町区石神の体育館に向かうため先日から敷いて置いた布団等の片付けが終わると、親父の姿が見えない、見失ってしまった。あちこちの避難所の名簿を見たが父の名前はなかった。翌日（一三日）石神体育館から相馬市に集合して、家族一二名で福島市に向かった。父の消息はまだ分からない。次女はお産の月に入っているため無事に出産出来る所へと思ひ、友人宅へお世話になることにした。こたつに入り暖かい布団で寝ることができ、こんなに有り難く思ったことはない。しかし、友人への気遣いもありましたが、もつと遠くへ避難しなければと思ひ、会津若松市河東体育館へ避難しました。

娘は無事四月一日に女兒を出産しました。娘の嫁ぎ先は津波により流され両親が亡くなりました。生まれ代わりのような気がしません。

一緒に避難してきた長女娘には二歳の男の子がいます。毎日運動会のように元気に跳ねまわる姿を見て癒（いや）されました。持参した長座布団、毛布で肩寄せ合い三ヶ月、赤十字の医師、看護師が常駐、暖かい食事が用意され大変お世話になりました。一時帰宅で帰宅する度にこのままでは駄目だ、「何とかしなければ」と、思ってきた。

一月五日長女が女の子を出産した。避難生活で、嫁いだ娘たち、妻の母との生活が出来たことは幸せだったかも知れません。

**工房移転** 帰宅の度に商売の機械が錆びていく、無事だった商品、震災前から考えていた自分なりの人生の終わり方、全て狂ってしまった。三月になると年金が支給され

る。のんびりとこのまま暮らすかと思っても歯車が外れたままではどうしようもないし、できるだけ元の生活に戻さなければと思いが強くなり、五月になって決断した。

「自分にはやり残した事がある」「自分は職人だ、手職がある」、工房を会津喜多方市へ移転した。ゼロからの出発と云うよりはマイナスからの出発である。機械を運んで来れば何とかなると思っていた。そんなあまいもんじゃなかった。

二〇人のボランティアにお手伝いを頂き、機械持ち出し準備のための片付けが連日続いた。ゴミは出せない。「何が復興だ」イライラする。

喜多方の工房（工場）へ四屯トラックに六台運んだ。何とか格好が付きましたが、予算は大幅に超過してしまった。今後、南相馬小高区の工房（工場）では出来なかった事に挑戦していくつもりだ。

現在は開店休業状態であるが、開発新商品が完成しつつある。家族は最近前向きになり明るくなってきた、有り難い事です。ぜひ、私の商品を見に来て下さい。

〔原発事故被災者 相双の会〕 喜多方市 南相馬市小高区 板倉 好幸

## 階級闘争の「知の眼差し」で

—起死回生の手を提示すべき—

三年前、有権者大衆は、長年にわたる自民党政権に引導を渡すべく、民主党に票を集中し、立法院における強大な権力を与えた。その切なる期待は無惨極まる形で裏切られ、自民よりもヒドイと、こんどはまたぞろ、参議院選挙で自民党に圧勝させ、ブレイキ役を期待した。

つい先日の両党の党首選や、保守の分裂と多党化、ハシモト維新などの蠢（うご）めきなど目撃して、心ある有権者は政局・政治を突出例として、他の由々しき問題群を総覧して、もはや救いようのないほどの混乱を実感し、また、絶望の余り、自らのアノミー、カオス、ニヒリズムの奈落におちていくのをどうすることもできずにいる。

かくいう私自身がそうであり、「腐れ選悪と蒙昧な田吾作たち」ということばで思わず口走ってしまうほどだ。しかしながら、ここはもつと冷静に、階級闘争的な知の眼差しでもって、今の情況全体を掘り下げ、どこに変革への突破口があるのかを具体的に見定めなければならない。

アノミーやニヒリズムに足をとられるようじゃ、今まで学んできた、その「知」が泣くというものだ。そう気を取り直して、私は次のように考えていった。

①全体としては少数派の護憲勢力の共闘態勢をいかにして創出するか。毎週金曜日などに集まり、正義の怒りを諸々の権力にぶつけている人々を結集し、心ある労組も巻き込んでいくか。この展望なしに選挙闘争もできぬ。

②自公や民主を走狗とする腐れ政党と、支配階級の本体・財界の改憲策動、歴史偽造、排外ナショナリズム、弱者庶民の生活破壊は、今や待ったなしの横暴の只中にある。これらを掣肘する束ね役は一体誰が担うのか。真の階級闘争の覚醒者は、これを示すべきだ。

二〇二一・一〇・二一、花井 吉宅

# オスプレイ配備阻止

― 普天間現地行動報告 ―

**主要ゲート封鎖** 二六日から始まった「オスプレイ普天間配備阻止行動」は、二七日から野嵩ゲート、二八日に大山ゲートを封鎖し、二九日には急遽開けられた佐真下ゲートを封鎖することで、暴風下にも拘わらず、主要三ゲートのすべてを座り込みと車で封鎖することに成功した。

当初報じられた二八日からの普天間への飛来は、怒りに燃え創意に富んだ闘いによって追い込まれ、「台風を避ける」との口実で一〇月一日に延期された。

日米両政府と米軍はその失敗を総括し、三〇日からは警戒態勢を敷いて、ゲート周辺を警備車両で占拠し、多数の機動隊で不法・暴力的に鎮圧作戦を行った。

権力側はあろうことか、国道に並べた四台のバスで歩道との間にトンネルを作り、それをさらに機動隊が包囲した「青空留置場」を設置し、その中に野嵩ゲート前に座り込んでいた人々をゴボウ抜きにしたあげく、四時間近くも監禁したのだ。弁護士・国会議員といえども埒外（らちがい）ではなかった。従来、基地敷地は米軍提供施設として国内法の適用外とされてきた。米兵が事故・犯罪を引き起こしても、基地内に逃げ込めば手が出せない状況が、「復帰後四〇年間」も続いてきたのだ。

県警は、「不退去罪」や「道交法違反」などというデタラメをこじつけて、逮捕・監禁、レッカー移動を強行した。また、ゲート前の空き地添いにはコンクリートの壁で仕切り、中に入れないように阻止線を張った。これら無法な暴挙は、権力側の危機感と焦りの現れに他ならない。怒りと屈辱に身を震わす民衆の闘いは、そうした攻撃に屈するものではない。闘いは早朝から深夜まで、執拗かつ創意あふれて展開された。

**飛来** 一〇月一日、オスプレイの飛来が報じられたこの日、野嵩ゲート前は県民大会実行委員会と平和運動センター、平和市民連絡会の構成団体、ウチナーをはじめ全国から駆け付けた人々によって埋め尽くされた。ここでもまた「三重のカード」が張り巡らされ、基地内には米兵が、ゲート付近には雇われた民間カードマンが、そしてその外側には県警機動隊の車両と制服の壁が、嚴重に取り囲んでいた。

ものものしい警備の中で、実行委による配備阻止集会が始まった。国会議員団、県・市町村議員団、各首長からそれぞれ闘いの決意表明を受け、平和センターに結集する各労組や市民連絡会、地元住民から「絶対に阻止し、普天間の閉鎖・返還を実現する」との力強い発言が相次いだ。その最中の一時過ぎ、六機のオスプレイが南西と東方向から飛来してきた。「来たぞ！」の声が上がり、喉が張り裂けんばかりのシュプレヒコールが叩きつけられた。しかしそれをあざ笑うかのように、続けて着陸した。悔し涙を流しながらも、怒り心頭の参加者は顔を真っ赤にして抗議を続けた。こうして一日目の闘いは、夜八時過ぎまで実に十三時間余りも闘い抜かれた。

二日目も前日同様、朝七時から実行委、八時から平和センターが主催して夜の八時まで座り込みと集会が開かれたが、欠陥機ゆえ故障した三機を除くもう三機が飛来した。この間には、風船飛ばしや凧揚げによる飛行妨害行動も取り組まれた。この凧揚

げは米軍も相当嫌がったようで、それを避けて飛来コースを変更したと噂された。実際、糸やタコの中に金属が仕込まれているのではないかと、恐れていたようだ。基地内に落ちた凧をわざわざフェンス際まで持ってきて、ナイフで切り刻んでみせた。ヒステリックな対応だ。野嵩ゲートでも凧が揚げられたが、風向きが悪く基地と反対側に上がった。

三日目からは実行委が行動を終了し、平和センターと市民連絡会、それに地元住民の行動となった。それを見越したように権力の妨害と介入がエスカレートした。七時前に会場となつて空の空地に行くと、すでに制服警官が配置され、参加者で埋まっても出て行かず、行動の間監視を続けるという異常事態。何が何でも暴力装置で鎮圧すると言う構えだ。追及すると、「皆さんの安全を守るため」などとぬかす。ほごくな！だ。この態様のどこに民衆を守る事実があると言うのか！世界一危険なオスプレイを人々の頭上に飛ばす米軍を取り締まるのが、お前たちの義務だろうが！それに手を貸しておいて、何が皆さんを守るだつ！と追及と闘いは夜まで続いた。

この日は名護でも市民大会が開催され、続いて各市町村大会が予定されている。当面のゲート前行動は日曜まで続けられるだろうが、全国的運動に発展させるべく様々な努力がなされている。署名や自治体決議、さらに対米行動や提訴、米軍と直接対峙する諸行動、輪番制のゲート前行動、県民投票や人間の鎖なども検討されている。

配備阻止はできなかったものの、闘いは創意的教訓を生み出し、新たな段階を迎えた。  
(スクラムユニオン広島)

## 話し合い求め市長室前座り込み

― 尼崎市 労働福祉会館廃止に抗して ―

九月四日、「労働福祉会館の存続を求める会」は尼崎市市長室前での座り込みを行いました。尼崎市議会で労働福祉会館の廃止が決まっているのになぜ今頃と言われればその通りですが、この座り込みは、私たち「労働福祉会館の存続を求める会」との話し合いの場を設定しない尼崎市の態度、「話し合いに応じないのであればこちらから話し合いに行く」と行動が決まりました。

座り込み行動には労働組合や利用者など五十人が参加しました。私たちが議会での条例採択後に求めた要求は本当に慎ましい内容でした基本は次の通りです。

① 市長は『重要な案件については複数案を提示し市民の意見を聴取する』と公約されたにも関わらず、労働福祉会館の廃止問題は、存続を求める会や市民説明会での住民や利用者からの疑問や意見に一切耳を傾けることなく労働福祉会館と労働センターの廃止を強行されました。これらの経緯を明らかにし稲村市長の今後の市政運営の基本的な考え方を明らかにされたい。

② 貴市は労働福祉会館と労働センターが廃止されても代替え施設があり問題がないと説明されました。労働福祉会館の廃止後、労働福祉会館利用者に対し、各団体の活動が停滞することなく継続できるように利用可能な施設などについて納得いく説明を

されたい。」

年間二十万人が利用する労働福祉会館の廃止を強行した尼崎市に対し当たり前の要求です。この要求に尼崎市は五月十六日に交渉の場を設けましたが、「市役所南の駐車場に六階建ての複合施設を建設し、ホールと会議室を設置する」という回答でまともに答えませんでした。「要求事項を読んでいない。またにも市民と向き合おうと考えていない」としかいえない回答に参加者は怒りをぶつけ、責任ある立場の人の出席を求めるとともに書面による回答を求めました。

ところが、六月、七月、そして八月が過ぎてても約束した話し合いの場が設定されなかったので、九月四日の行動となったわけです。（武庫川ユニオン）

## 東京「原発いらぬ」八〇%

—東京新聞世論調査 宇都宮さん勝利へ—

東京新聞（十一月一八日付）は、都知事・衆院選を前に世論調査結果を発表した。主な質問は①都知事投票に行くか、②石原辞職をどうみるか、③消費税率上げに賛成か反対か、④どの政党を支持するか等の十項目。①③④の質問の興味、関心はない。これからの労働者・市民の動向を占うと注目されるのが、政治・権利意識を原発の是非を問う項目での回答だ。原発爆発で衰えつづけていた権利意識（NHK「現代日本人の意識構造」調査）は劇的に変化しつつあることを示す。

その一、東京新聞は問う。「東日本大震災の後、デモや集会、署名運動など政治に直接働きかけようという動きが広がっています。あなたはこうした動きに共感しますか」に、「大いに共感」三二・八%、「どちらか」と共感「四四・九%の七七・七%、「共感しない」六・一%「どちらか」と共感しない「一二・六%の一八・七%。七八%対一九%で原発ゼロは夢でなく、現実であることを示し始めた。

その二、東京新聞は問う。「政府は二〇三〇年代に原発ゼロを目指す新エネルギー政策を決めました。日本の原発政策はどうすべきかと思いませんか」に、「ただちに原発稼働をゼロにする」一五・六%、「二〇三〇年代よりも前倒ししてゼロにする」二七・〇%、「二〇三〇代にゼロにする」一四・九%と原発はいらぬは五七・五%。さらに「原発は減らす。ゼロにはしない」二九・〇%を狭い意味の「脱原発」と考えれば八〇%を超える。「現状を維持する」七・八%の三六・八%。「原発を増やす」は一・三%でしかない。

これが東京での世論である。衆院は十一月一六日解散。投票日は都知事選と同じ十二月一六日となった。弁慶のように大きななを振り回すばかりで知恵のない石原慎太郎、地方の一寸法師から全国に躍り出し戸惑うばかりの橋下徹の野合はどうなるか。二人の共通点は「中央集権打破」のようにみえるが、橋下は「東京一極集中打破」、石原は大阪都構想に「都は天皇のおわします所、日本に都は二つもない」。

石原と橋下は年齢、思想、感覚で天と地ほどに違う。石原は譲歩した。「たちあがれ」は心中、憎しんでいっぱい。民主が分裂、消滅の道まっしぐらのように、この野合はすぐさま分裂、解党となる。

## 人権派弁護士・宇都宮健児氏立候補へ

東京都知事選挙について

マルクスは『ルイ・バナパルドのブリュームメル十八日』をこんな書き出しで始める。「ヘーゲルはどこかでのべている。すべての世界的な大事件や大人物はいわば二度あらわれるものだ、と。一度目は悲劇として、二度目は茶番として、と、かれはつべくわえるのをわすれたのだ」（岩波文庫版、一七頁）

石原慎太郎氏が都知事を放り投げた。「クーデタ」のように二つの保守党の間に割って入り、三つめの極右反動政党をつくりたいとしてだ。石原が新党の核としたいとするのが、これまた極右反動の老人クラブ「たちあがれ」。石原は大日本帝国憲法という幽霊をよみがえらせた。

石原が「いっしょにやろう」とよびかけるのが、メディアの灯（あかり）で光つづけられた「維新」の橋下徹。薩長連合をきどり、おれは坂本竜馬を演じられれば充分だ。「維新」と命名したのは自民党に見切りをつけ脱党した大阪府・市の地方議員たち。橋下君はそれにのつた。彼らに明治の維新にみられる進歩性はまったくない。まさに「茶番」である。

日本のエセ革新者や保守反動主義者たちは、過去の革命家、革命という幽霊で身を飾ろうとした。たとえば、昭和維新を呼号した北一輝のようなファシストたちである。若者は石原のような老人に魅力を感じない。そんな人物から「恋人」とされる橋下についても同じだ。新しい党づくり破綻は事態の進行が示すにちがいない。

十一月はじめ国会に解散風が吹き始めた。「野田首相は自由貿易策であるTPPを選挙の争点としたいらしい」が、政局論者のざわめきだった。分裂が止まらない民主党。消費税増税が第一回分裂とすれば、解散、TPPは必ず第二の分裂を引き起こす。しかも野田内閣支持率が二〇％を割り、民主党支持率は一〇％強でしかないなかである。自民党支持基盤も劣化の一途で伸びる傾向はまったくない。彼らが生き延びる道は馬鹿のように「おれたちは保守本流」と叫び続けることだけだ。

こんな中でのとつぜんの東京都知事選である。選挙告示は十一月二十九日、投票日は十二月十六日。東京は人口一千三百万。日本の中央集権政治の中心自治体だ。全国に与える影響は大きい。メディアは候補に名乗り出るのはだれかと予想に忙しい。

告示日まで二週間というのに、名乗り出たのは前日本弁護士連合会長（人権派弁護士）の宇都宮健児氏とルンペン政治家の松沢成文元神奈川県知事だけだ。石原が後継に指名した猪瀬直樹副知事はダンマリを決めこむ。彼は虎の威を借りた狐のような人物。「虎」のゆくへを見守りつづける。自民、公明、みんなは猪瀬を候補としたい、勝てる候補をかつぎ、衆院選に傾注したい。

宇都宮健児氏は十一月八日、「人にやさしい東京都をつくる会」におされ立候補を決意。共産党系の「革新都政をつくる会」、社民党は宇都宮氏を支持。脱・反原発の

ウネリをつくった「さよなら原発アクション」「官邸前金曜デモ」が力を合わせ宇都宮氏勝利に突き進むことになる。

記者会見で、宇都宮氏は十一月八日、「『人にやさしい東京』をめざす」と①誰もが人らしく、自分らしく生きられるまち、東京をつくる、②原発のない社会へ―東京から原発を進める、③子どもたちのための教育再建、④憲法のいきる東京をめざすと、都政で実現をめざす四つの柱を強調した。

「東京の難問」として上げるのが①オリンピック招致、②築地移転、③新銀行東京、④尖閣諸島買収で集めた寄付金の処理。

以下は、宇都宮健児氏の立候補声明「『人にやさしい東京』をめざして―都政で実現をめざす四つの柱」の全文である。十一月一四日、人にやさしい東京をつくる会の主催で「宇都宮けんじさんとともに人にやさしい東京を！」をスローガンに、東京を変えるキックオフ集会が開催。会場は一千四百人であふれかえった。

◇資料 宇都宮 けんじ氏の立候補声明 ◇  
「人にやさしい東京」 都政で実現をめざす4つの柱

一三〇〇万の人たちが暮らし、働き、学び、育つ、東京。

私は、東京の持つ大きなポテンシャルを考えたとき、都知事が本気になって人びとの生活と社会のために働けば、どれほど大きな貢献ができるだろうと考えてきました。

さる十一月六日に公表された「新しい都政の実現を求める声明」に、私は名を連ねました。私がつくりたいのは、まさに「人にやさしい東京」です。

私は、多重債務の問題をはじめとして、弁護士として貧困の問題に長くかかわってきました。リーマン・ショックのあった二〇〇八年の暮れから翌年にかけておこなわれた「年越し派遣村」では名誉村長をつとめ、その後、完全無派閥の弁護士としては初めて日弁連会長となり、人権擁護活動や、東日本大震災と原発事故の被災者・被害者支援などに取り組んできました。

やさしさこそ本当の強さだと、私は確信します。「上から目線」ではない、人にやさしい東京――。その実現のために、皆さんとともに働くことを、私は決意しました。

東京を変える4つの柱の実現をめざします。

(1) 誰もが人らしく、自分らしく生きられるまち、東京をつくります。

貧しい家庭で育った私は、誰もが人間らしく、そして自分らしく生きられる社会にしたいという思いで、弁護士になりました。「何が無駄といってまず福祉」という姿勢の前都政のもと、破壊されてきた東京の「生きやすさ」を、私は再建します。

私は、若者もお年寄りも、女性も男性も、障がいのある人もない人も、みんなが参加できるまち・東京をつくります。雇用の拡大のための施策、失業時の所得保障を充実し、人間らしい働きかたのできる東京をめざします。

私は、高齢者や収入のすくない人、自営業者にさらに負担を強いる消費税引き上げに反対します。東京にシャッター街は似合いません。

大規模再開発などの支出を見直し、福祉・医療を充実できる財政を確立します。

(2) 原発のない社会へ——東京から脱原発を進めます。

絶対に繰り返してはいけない原発事故。大消費地として東京は、福島原発事故にも少なからぬ責任を持つていると私は考えます。福島をはじめとする被災地への支援のために、自治体としてできるあらゆることをおこないます。これまでのように、事故などのリスクを他県に押し付けながらエネルギー供給を得てきた構造そのものの見直しを進め、再生可能エネルギーの普及など、脱原発のために東京都ができるあらゆることを、都民の参加と知恵を得ながら検討し、実施していきます。

(3) 子どもたちのための教育を再建します。

私は、自由と自治の気風があふれる東京の学校を再建します。教育現場が自由であるほど、子どもたちにとっても良好な教育環境と成果がもたらされることは、諸外国の例を見ても明らかです。

前都政が進めた「日の丸」・「君が代」の強制によって、多くの教育関係者が言葉に表せない苦しみを強いられてきました。私は「上から目線」の教育の統制に反対し、自由で生き生きした教育をつくります。学校選択制などで競争をあおるのではなく、着実な教育インフラ整備をはじめとする、子どもたちにあたたかい教育行政に転換し、いじめ問題の解決に取り組みます。

(4) 憲法のいきる東京をめざします。

憲法は法律家としての私の原点であり、戦後日本の平和の基盤となってきた宝です。私は憲法「改正」に反対します。前都政では、アジア諸国をはじめとする都市との交流は停滞しました。私はそれをすぐに再開します。沖縄の人々とともに、自治をまもる立場からも、普天間基地の辺野古移転、欠陥機オスプレイの配備は認めません。米軍基地のない東京をめざします。

憲法9条とともに、憲法二五条は、「反貧困弁護士」としての私のライフワークです。

**都民みんなの声に耳を傾けて、「東京の難問」の解決をはかります。**

4期つづいた石原都政のもとで、都政には課題が山積しています。

オリンピック招致、築地移転問題、新銀行東京、尖閣諸島買収で集めた寄付金の処理など、前知事が突然、放り出してしまった課題は、「強いリーダーシップ」という名のもと、都民の声に耳を傾けない強引な施策によって引き起こされてきました。

「解決」を押し付けることは、本当の解決にはなりません。私は、パブリックコメントはもちろん、タウンミーティングなどを積極的に開催し、住民参加のもと、実質的な議論を丁寧に進めて、着実に解決していきます。それこそが、自治とコミュニケーションの中で求められる本当のリーダーシップだと考えるからです。

東京は変えられます。人と人が支えあう、もっとあたたかい社会に変えることができます。誰かが変えるのではなく、私たち自身の手で、変えることができます。それが今度の都知事選挙なのではないでしょうか。

## ◇ 読者からの おたより ◇

**注文です** 先日は「確かな脱原発への道」を、お送りいただき誠にありがとうございます。さつそくですが占冠地区でも仲間たちに是非読んでもらいたいのので二十冊申込みますので取扱よろしくお願ひします。出来れば十一月十九日までに送っていただければありがたいです。この日は、旭川大学の古田先生を招いて連合占冠の「脱原発」の学習会がありますので、この会場で仲間たちに購読を進めたいと思っております。取り急ぎ用件のみで失礼します。(北海道勇払郡占冠村 五十嵐正雄)

**編集部より** 原さんたいへん喜んでいらつしやいました。感謝です。  
**届きました** 今日、原さんの著書届きました。ちょうど注文しなければと考えていたところで、甘えさせていただきます。この間、「たより」を取り上げていただきながら何の返事もせずすみませんでした。普天間の野嵩・大山の2ゲートでは、粘り強く抗議活動が続けられていて、私もサボることができず五時起ききの生活にすっかり慣れてしまっています。(沖縄・M)

**激しい雨の中一〇名も** 社会通信発刊以来の読者です。私は、昨年五月に「脱原発はりまアクシヨンの会」を仲間と立ち上げて以来兼仲監督の映画上映会、脱原発集会和デモ、毎月十一日には署名と訴えなどに取組んできています。今年の七月からは、関電姫路支店に対して「毎週金曜日」抗議行動を続けて、今週で十九週目になりました。また、先週末の十一日(日)には急ぎよ「全国一〇〇万人行動」<sup>③</sup>「はりま」と銘打って激しい雨の中一〇名ものメンバーが集まり集会をしました。私たちの脱原発ニュース参考に添付させてもらいます。原野人さんの「確かな脱原発の道」を一〇冊送付お願いします。(兵庫・S)

**共に議論していきたい** お忙しい中、身に余るような激励の文章を送っていただき、ありがとうございます。お言葉に恥じないよう、頑張りたいと思います。組合の役員は、年齢の関係で今年で終わりになり、寂しい気はしますが、我々は資本主義の中で生きる身、自分たちが働き、闘ってきたこれまでの時間を振り返り、歴史の中でその意味を検証しながら、後輩が自信を持って今より大きな闘いを作れるよう、今後とも共に議論していきたいと思ひます。(O)

**一冊ですが** いつもご苦勞様です。通信で紹介されている、原野人さんの「確かな脱原発への道」を、一冊で悪いですが送って頂けませんでしょうか。送付先は…でお願いします。代金については、労金口座に本日振り込みます。ご確認下さい。(高知・N)

**一冊で恐縮ですが** 下記あて送付のお手配をいただけませんでしょうか。(新潟・T)

**(南)サンピアの近況** ご注文下さいゆめぴりか：一食の価値有り！ 名寄に於ける事業体・有有限会社サンピアでは、「雇用」の創出と地域との共栄を目指し、現在十六名(元団員十三名、一般三名)で運営しています。クリーニングの取次ぎ、軽運送、名寄市の一般廃棄物処理等を柱として事業展開しており、米の販売認可も取得し特別栽培米を扱って来ましたが、さらに仕入先の充実を図り、府県産米と、生産農家(北海道和寒町)からの直接仕入れルートを確立しました。新潟コシヒカリに並んで味覚「特Aランク」に入った「ゆめぴりか」「ななつぼし」を単一品種・新米一〇〇%でお届けし、お客様から喜ばれています。老人介護施設建設へ、老人介護を幅広く展開している北九州のケアセンターとタイアップし、名寄、稚内、音威子府の三事業体が連携。十一名が共同出資する新たな会社(株)旭の里を二〇一一年十二月に設立しました。現在、旭川市に有料老人ホーム(七九床)の建設工事を着工しています。要介護2以上の方を対象とするこの施設の完成・オープン予定は、来年四月。入居費は、月七万五千円と、生活保護世帯の方も入れる価格設定を予定し、社会的にも意義ある事業となります。この施設では、介護、調理関係で約五十名の雇用創出が見込まれます。同時に(南)サンピアとしての既存の事業にも大きな厚みが増えることとなります。今後とも、皆様の応援をよろしく願ひします。(南)サンピア

**本** 早くに書籍送っていただきながら、代金送り、おくれてしまつてすみません。(東京・K)

**編集部より** 本の感想寄せていただければ嬉しい。(北海道・北見市・G)

**分析方向性** 今後も適確な情勢分析と方向性をお願いいたします。(北海道・北見市・G)

**編集部より** 複雑かつ錯綜する時代。なにか要望言つてくれれば、お願いです。  
**労働委員会闘争** 現在、えちごユニオン組合員の雇ひ止め撤回闘争中。会社代理人が東京の弁護士に変更になったとたんに団交拒否、労働委員会闘争がはじまります。(新潟・K)

**編集部より** 東京のその弁護士、やっぱり悪質なんだ。大阪の橋下も同じ類の弁護士だったのでしよう。